

躍動する幸福の国？

日本大学 村井佳世子



ゴールデンウィークに三泊でシンガポールに出かけた。知人に会うことと休養が目的で観光はあまりできなかったが、21年ぶりのシンガポールは大きな変貌をとげており目を見張るものがあった。

まずチャンギ国際空港に到着してその規模と整備された新ターミナルに驚かされる。空港内部は広すぎて目をこらしても先が見通せない。通路がどこまでも永遠に続いているように見える。都市中心部へ向かう道路や建物のスケールは大きい。シンガポールの新しい名所としてすでに名高いマリーナ・ベイ・サンズ（写真）は言うに及ばず、滞在中に訪れた郊外の住宅地の美しさや高層団地群、整然とした道路や交通網など、整備されたインフラに目を奪われる。国全体の面積は東京 23 区と大体同じくらいというが、人口が少ないとは言え、空間の使い方が贅沢で豊かに見える。

繁華街に出かけると、週末のせいか人出が多く賑わいを見せている。若者や家族連れの人々の顔の表情は明るい。なんだか町全体が一つのアミューズメントパークのようで、そこで人々が豊かな生活を謳歌しているように見える。気になる若い人たちの表情は、元気で複雑そうだ。シンガポールは人種・宗教・言語が多様で複雑だが、互いの軋轢や所得格差による生活苦や不満はないのか。そんな疑問を抱いたが、それどころか近年は海外からの移住者が急増し多様性が増しているという。日本から生活拠点をシンガポールに移すビジネスマンもいる。なぜか。

シンガポール在住の知人たちの話によると、急速な発

展は国民の負担になるものだが、そうではないという。それはシンガポールが外資を積極的に受け入れているからだ。国土は小さく資源も少ないが、地理的立地の恩恵を受けて、昔から東南アジアの金融、貿易のハブとして機能し、それに加えて積極的に外国企業を受け入れる税制や緩い規制のせいで、世界のビジネス拠点となっている。世界中から人が集まるような仕組みができており、それで成り立っている国ということだ。言い換えれば多様性あつてのシンガポールなのである。人種のつぼでありながら治安がよく清潔な町。いいこと尽くしのようだが、最近では市民の不満も聞かれるという。高級車フェラーリに乗った外国人の乱暴な運転による死傷事故がきっかけで、裕福な移民に対する目が厳しくなっているようだ。

帰りの機上で、家族とシンガポールで暮らし、これから日本へ出張という日本人ビジネスマンに遭遇した。魅力的な教育環境で不自由のない生活を送っているという彼の話を聞きながら、活力にあふれたこの国に住む人々のことを思った。

表紙写真
についてギリシャ メテオラ：
天空の修道院

麻布中学・高校 岩佐洋一

ギリシャ中部、アテネから電車で揺られること 4 時間半、目の前に奇石群が広がってくる。その岩の上に屹立する修道院が 6 つ、それが世界遺産にも登録されている「メテオラ修道院群」である。

今でこそ観光客にも解放されている修道院群だが、かつては修道院に行くための橋や階段など一切なく、縄梯子と滑車に吊るした網袋だけが下界とつながる手段だったという。そもそもこの写真のような独立した岩山の上に修道院を建設すること自体が想像を絶する。これらの修道院から下をのぞき見るだけで高所恐怖症の私はかなり足が震えた。こんなところに、立派な修道院を建て、そのうえ縄梯子しか行く手段を設けないなんて「修行のためとはいえやり過ぎではないか。」と驚くばかりだった。

実際、少なくない数の修行僧が転落死してきた歴史があるそうだ。修道院内の宗教画は殉教者、殊に残酷な死に方を描いているものも多い。かつてここで暮らしていた修道僧には同じような覚悟が求められていたのだろう。それでも 15、16 世紀の最盛期には修道院が 24 もあったそうだ。

現在でもギリシャ北部自治州聖山アトスでは、このような伝統を継承する修行僧が俗界との関わりを断ち、日夜厳しい修行生活を送っている。山とは言っても 385 平方 km の広大な土地にいくつもの修道院や修行小屋が点在していて、入山には予約と許可証が必要となり、「女人禁制」ゆえ女性の入山は許されていない。

「ギリシャの支配的な宗教は、キリスト教の東方正教会である。」という条文がギリシャ憲法にあることをご存知だろうか。「信教の自由」を認める条項も別にあるそうだが、政教分離の国日本から来た私には新鮮な驚きだった。だからこそアトス半島のような広大な土地すべてが聖地として認められているのだろうと納得もできた。

従って、ギリシャの義務教育では当然のように「宗教」の時間があり、東方正教会の教理や歴史を子供たちは全員学ぶそうだ。とは言え厳しい戒律とは無縁のようである。メテオラに来る車中、男子中学生 4 人とコンパートメントに乗り合わせた。彼らはいたってフレンドリーで、かなり下手な英語でも臆さずどんどん話しかけてきた。下車後、道案内まで買って出てくれた。嬉しい反面、「外国語でコミュニケーションを積極的にとる姿勢」では日本の中学生は完敗だな、と教員として多少反省した次第である。（まあ、ワールドカップブラジル大会ではギリシャに完勝するでしょう。）